

## <合唱の楽しみ> 第三回「正しい音程とは」

正しい音程とは、この世の中にあるのでしょうか。あるとすれば、ある条件の基にあるのでして、そもそも音そのものに正しいとも正しくないともありません。


それでは、私たちはどんな条件下で正しいとか違うとかを言っているのでしょうか。それは、ヨーロッパの音楽の歴史の中で生まれて来た条件、主にルネサンス以降、特にバロック音楽と言われるヨーロッパの音楽文化を基礎に、私達は音楽を楽しんでいます。このことは大切なキーポイントです。

そのバロック音楽とはどんなものなのでしょうか。

- ① 拍を持つ音楽になった。例えば、4拍子とか3拍子とか。
- ② 対位法音楽から旋律（メロディー）を優先する音楽に変わろうとした。
- ③ 音楽の中に調性という感覚（それまでは旋法という感覚）が芽生えて、そこで、調性と純正調との矛盾の中で葛藤してきた。これを解決したのは、たくさんの作曲家、音楽学者の努力の後、バッハが具体的に結論をだした。

これが、平均律という調律方法です。

- ④ しかし、純正調に別れを告げ平均律主体の調性音楽（純正調の調性では転調が制限されてしまう）になったがために、ハーモニーの美しさは少々犠牲になった。
- ⑤ この平均調律と純正調律の違いを体感するには、ハーモニーディレクターというヤマハがだしているキーボード(HD-200)で体感するのが良いでしょうが、無くても集中力があれば体感出来ます。

以上のことで大まか理解をしていただきたいと思います。今回知っていただきたいのは、1600年以降のヨーロッパ音楽を前提に正しい音程を考えている事になります。そしてそれは、調性という前提があって答えが出るわけです。例えの音は、八長調においては Si  ですが、口長調においては Do であり、ホ長調においては Sol になり、ト長調では Mi になる訳です。それぞれ純正調律においては音の高さは微妙に違うわけです。しかし、平均調律では、全て同じ高さの音 H(ハー)になる訳です。ここが大きな違いです。

合唱するとき、このことを理解していないと美しく“ハモる”合唱には到達できないわけです。

※ 19世紀後半から生まれて来た調性を離れたシェーンベルグに代表される12音技法による作品の演奏にあたっては、do re mi fa sol la si(ti) 唱法は有効では無い。